

かこれをわがものにはなすべきと、わりなくおぼしまどひぬ。
〔枕草子八〕ちかくてとほき物

おもはぬはらから、えんぞくの中、

〔源氏物語竹河十四〕これは〇玉げんじの御ぞうにもはなれ給へりし後の大殿わたりにありける、

わるごだちのおちとまりのこれるが、とはすがたりし置たるは、

〔日本書紀神代一書曰略〕中時伊弉諾尊亦慙焉、因將出返、于時不直默歸而盟之曰、族離、又曰、不負於

族、略中、不負於族、此云宇我遷磨概葺、

〔古事記下雄略〕故獻能美之御幣物、能美二布縵白犬著鈴而己、族名謂腰佩人、令取犬繩以獻上、

〔古事記傳四十一〕族は書紀神代卷に訓注に、宇我遷とあるに依て訓べし、此訓注に依り、宇賀良、

皆賀を濁るべき言なり、登、母賀良は今も濁ていへり、万葉三四丁に親族兄弟、此親族今本に、ヤカラと訓べし、訓

〔古事記下安〕根臣即盜取其禮物之玉縵、纒大日下王曰、大日下王者、不受勅命曰己妹乎、爲等族之下

席而取横刀之手上而怒歟、

〔古事記傳四十〕爲等族之下席は、比登志宇賀良能斯多牟斯呂爾那良牟と訓べし、爲は那佐米夜

ラノムシロトラセムヤと訓れたれど、然は訓がたし、師賀茂眞淵は此をヒトシキヤカ

とあるべく、族は、書紀神代卷に、宇我遷と訓注あり、又親屬顯宗卷に、親族安閑卷に、同族などあ

り、宇賀良と夜賀良との差別、宇賀良は生族、夜賀良は家族の意か、なほよく考ふべし、さて宇賀

良も、夜賀良も、波良賀良も、皆加を清て呼へども、右の書紀の訓注に依らば、准へて皆濁るべ

きか、はた濁ると清むとあるか、悉には知がたし、登母賀良は今も濁りて、此に等族と云は、若日

下王と大長谷王とは、姨甥に坐て、共に天皇の御子なれば、同品の御族に坐よしなり、下席に爲

るとは、大長谷王の妃に爲坐ことを、如此は云るなり、夫婦は交合時に、婦をば夫の下に敷故に、

下に敷れむと云意なり、下席とは、下には敷よしなり、さるは正しき言には非ず、たゞ怒りて